

原爆の憎しみを越えて*

開 浩一**

Beyond anger of the Nagasaki atomic bomb disaster

Koichi HIRAKI**

はじめに

8月、ここ鎮西学院では特別なイベントがおこなわれる。学院の幼稚園園児、高校生、大学生、教職員、卒業生、被爆者の遺族たちが、かつて学院の校舎があった長崎・竹の久保校舎（現・活水学院中学校・高等学校）から、現在の諫早・中井原のキャンパスまで、約30キロの道のりを、命の水をバトンとしてつなぎながら歩く。

毎年のようにこの日は暑い。夏の容赦のない太陽に焦がされながら、70年前のあの日の、鎮西学院の生徒と教職員のみなさまに思いを馳せる。一発の爆弾により焦土と化したあの日、どれほど凄惨なものであったのか。どれほどの痛みをもたらしたのか。そして、その後の生き方にどのように影響を与えたのか。それは、実際に経験した人でなければわかりえない。ありがたいことに、当時、鎮西学院の中学生であったお二人の方が、インタビューに応じてくださった。

本報告では、まず、鎮西学院の歴史をふりかえりながら、原爆が投下される以前の、鎮西学院の生徒が過ごしていた日常についてふれていきたい。

鎮西学院について

1881年（明治14年）、C・S・ロング師によって長崎東山手にカブリ英和学校が創設された。創立当初、カブリ英和学校はこじんまりとした私塾のようなものであった。しかし、英和学校で教わるキリスト教は、将来を切り開くものとして藩の家臣や旗本生れの階層の人々に受け入れられた。1906年（明治39年）、カブリ英和学校から鎮西学院になった。1930年（昭和5年）、鎮西学院は、長崎の東山手より竹の久保に移転し、暖房装置、水洗トイレ、噴水式飲料水設備などを備えた、近代的な鉄筋コンクリート4階建ての校舎が建てられた。堂々とした、しかも穏やかで上品な趣のあ

る校舎だったという¹⁾。この立派な校舎が、原爆により壊滅するとは、誰も夢にも思わなかったであろう。

昭和の初め、日本が軍国化への道をつきすすんでいくなかで、軍事教育の普及、国防意識の強化のため、鎮西学院にも陸軍省より将校が配属され、軍事教練がはじまった。配属将校は、日本の皇道こそが世界唯一の心理であり、外国の思想や宗教は不要であると力説した。さらに、キリスト教は敵国の宗教とみなし、教会に出席する生徒や信者の生徒にいやがらせをしたという。そして、学院の外国人宣教師は敵国のスパイとみなされ、帰国せざるをえない事態となった。そうした苦境に陥ってもなお礼拝は守り続けられていたが、それを良しとしなかった軍は、礼拝を中止しなければ学院を閉校すると圧力をかけた。学院は、やむをえず礼拝をしばらく中止することにした¹⁾。

1944年、学徒動員令が発令されたことによって、鎮西学院の生徒は、学業を返上して、工場で働くこととなった。工員が出兵して人手不足となっていた工場の穴を埋めるために、若い生徒の力を借りざるを得ない状況であった。生徒は、慣れない工場の仕事であったが、油にまみれながら朝から夜遅くまで懸命に働いた。原爆が投下された日も、鎮西学院の生徒は、三菱兵器製作所、日見トンネル工場、などの工場に動員されており、そこで負傷したり、命を落とした生徒も多かった²⁾。

1945年8月6日、広島に新型爆弾（原爆）が投下された。広島は長崎の町にも流れた。ところが、新型の爆弾と聞いても、結局従来の爆弾の少し変わった爆弾ぐらいを想像しただけであった。市民は、庭先の防空壕や、森の街々の繁み、崖に作った横堀りの防空壕にかくれることで安全だという認識でしかなかったという。一方、軍や市当局は広島を十分にキャッチしていたにもかかわらず、市民への避難対策や指揮はとられ

* Received December 1, 2016

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

なかった¹⁾。その結果、多くの人が命を落とすことになった。

そして、1945年8月9日、長崎はもっとも過酷な一日を迎えた。そんな大変なことが、これから起こるとは知る由もない鎮西学院の教職員と生徒は、いつもと変わらない日常を過ごしていた。

原爆が、その後の生き方に与えた影響

当時、鎮西学院中学校に在籍していたお二人から、被爆の体験について、また、原爆が、ご自身の生き方にどのように影響を与えたのかについて、お話を伺った。(なお、本報告への掲載については、お二方より承諾を得ている。)

Aさん

当時3年生、13歳だった。学徒動員令により、爆心地から2.5km離れた工場に配置され、軍需品を製作していた。

はやめの昼食をすませ、休憩をしていたことだった。空襲警報のサイレンが鳴り、強い閃光に包まれたかと思うと、近くに爆弾が落ちたかのような強い爆風を受けた。工場の窓ガラスは吹き飛び、木造の工場も傾いた。土煙で見えないなかを一目散に駆け、防空壕に避難した。長いあいだ防空壕から出られなかったが、自宅に戻ることが許されたため、同級生と一緒に防空壕を出ることにした。

街は、至るところから火が上がっていた。家族の安否が気になったため、自宅にかけ戻った。その途中、怪我をした人たちが、うめき声をあげながら水を求めてきたので、水を差し上げた。Aさんの名前を呼ぶ人がいたので振り向くと、上半身にボロ布をまとった人が立っていた。顔もわからないので尋ねたら同級生だった。ボロ布だと思ったのは、焼けただけれた皮膚がぶら下がったものだった。

翌朝、ようやく自宅にたどりつくと、さらに過酷な現実が待ち受けていた。焼け跡に父がおり、母、妹4人、従弟の骨を入れている最中だった。

それ以来、原爆を落とした国に強い敵対心をもった。そして、母の仇をとるために進駐軍の兵士を殺し、自分も死ぬことを考えていた。しかし、伯父にこう言われてたしなめられたという。「悪いのはアメリカではなく戦争である。戦争がもっとも憎むべき悪である」と。Aさんは、伯父の言葉でなんとか仇討ちを思いとどまった。

戦後の暮らしは、多くの被爆者と同様に苦しかった。かぼちゃや芋を食べて、空腹をしのいでいた。それでも、自立して暮らすために、懸命に生きてきたという。このような、苦しい時期を生き抜いてきた体験が自分を強くした。何が起こっても動じなくなり、困難に対して対処していける自信になったという。

「そうね、僕はその被爆前はね、やっぱり性格的にはね、弱かったですよね。だからすぐ泣きべそっていうかね。結局、人とあまり、同化しきれないというかな。やっぱりあったんですね。やっぱり被爆後のね、自分だけしか、頼れるものはない。というふうな事が強くなったんじゃないですかね。やっぱり自分が一番大事だと、それから人に頼っては何もできないということね。それは意志が強くなったよ」

のちに、原爆により命を落とした鎮西学院の生徒のお名前を、永久に残しておきたいという思いから、在校生の氏名を明らかにする活動に全力を尽くした。現在、鎮西学院中学校原爆死没者慰霊碑に命を落とした方のお名前が刻まれている。「悲惨な事実があったことを永遠に残し、これから学ぶ後輩の皆さんの戒めとしていただきたい」とAさんは願いを込めた。

Bさん

当時4年生、15歳だった。空襲警報の発令により、当時、働いていた工場から約1.5キロ離れた消防署へ伝令として走らされた。署で待機していることだった。敵機の爆音が聞こえたかと思うと、突然、稲妻を束ねたような閃光が目に飛び込んできた。次の瞬間、爆風によって身体は宙に舞い、床にたたきつけられた。背には2、3人の若者が覆いかぶさっており動かなかった。その若者の頭や顔を窓ガラスの破片が貫いていた。

爆弾が落ちて約10分も経過したところで、焼けた髪を振り乱して小走りする婦人、焼けただけれた手足の皮膚をぶらぶらさせた男性、血まみれの子をおぶった婦人が通りを抜けるのを震えながら見た。

Bさんは、家族のことが気がかりであったが、自宅の周辺は被害が大きかったため帰れなかった。2日後、自宅へ向かってみると廃虚と化しており、焼け跡からは白煙がのぼっていた。それか

ら、しばらく消防署に泊まりながら救援活動の手伝いを行っていた。数日後、偶然にも、防空壕から首を出していた母を見つけた。思わず抱きつき泣き崩れたという。しかし、壕内には顔に怪我をした祖母が横たわっていた。その後、祖母は満足な治療を受けることなく亡くなった。

被爆後の生活は困窮を極めた。焼け跡からこげた缶詰を拾い、こじ開けて食べた。また空腹に耐えかねて、カモメを釣って食べたこともあったという。

それから、月日が流れ、結婚を考える年齢になった。多くの被爆者が、放射能の影響が子供に遺伝するとの説が障壁となって、結婚を望んでも叶わなかったという。幸いBさんは伴侶に恵まれた。奥さんも被爆者だった。しかし、今でも、健康には不安を抱えており、夫婦ともに毎月の健康診断は欠かせないという。

2009年に、イタリアのローマを訪れ、みずからの被爆体験について語る機会に恵まれた。また、2011年には、「非核特使」として約3か月間、「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」でピースボートに乗船、船内をはじめ13か国14都市で証言を行い、世界に向けて力強く平和のメッセージを発信した。

「私たちがみると、いわゆる、原爆を落とした人が悪いっていうのはね、時のやっぱり正者っていうか、そういった形で、この戦争を勃発したわけですから。原爆は憎い、実際に自分が被災して、憎いけども、それを今どうっていう憎しみはね、なくて、いわゆるいかにそれを平和に向けていくかっていう感じしかないんですね。だから被爆者が生ける間に本当に平和になってもらいたいなという感じはします。もう時間ないわけですからね」

Bさんも原爆で家族をなくし、原爆による苦しみは憎しみを生じさせた。しかし、憎しみを原動力としながら、それを、平和な世界をつくるための力に変えていった。

まとめ

鎮西学院では、1945年12月までに、教職員、生徒を合わせて141名の方々が原爆の犠牲により亡くなった²⁾。夢や目標もあった生徒のみなさまの人生が無残にも絶たれてしまった。かろうじて生

き残った方々も、家族を失い、住む家を失った。原爆という兵器は、たんに街を破壊することのみならず、そこで、暮らす人々の命を、生活を、健康を、人生すら破壊する残虐な兵器であった。その原爆が、生涯にわたって被爆者に与えつづけた苦しみは計り知れない。

今回、貴重な体験を語ってくださったお二方も、原爆により家族や友人を失った。その喪失は、原爆そのものと、それを投下した相手国に対する憎しみの感情を生じさせた。しかし、憎しみから相手国に報復措置を取ることで、戦争という根本の問題を解決できない。そういう結論に至ると、世界を平和にするために何ができるか、それを冷静に考えることに転じている。

おそらく、この転換は一言で語れるほど容易なものではなかったであろう。頭ではわかっているけども、ふつふつと沸き起こる憎しみを抑えることは困難を極めたと思われる。それでも、個人のなかで生じた原爆への憎しみという感情を、後世へのいたわりへ、世界の平和を願うものへと、広がりを見せながら前向きに変化させた。

これは、自分のように原爆により苦しみを味わう人をつくってはいけない。家族や友人のように原爆の犠牲になる人を二度とつくってはいけない。こうした使命感がもたらした大きな転換ではないだろうか。

さらに、お二方は平和を願うことだけで終わってはいない。慰霊碑を建立したり、世界の人々へご自身の体験を証言したように、平和な世界をつくるべく実際の行動に移してこられた。

「変えられるものは変える勇気を、変えられぬものは受け入れる謙虚さを、そして、それを見分ける知恵を授けたまえ」

アメリカの神学者、ラインホルド・ニーバーが残したといわれる、この祈りの言葉が頭に浮かんだ。お二方の、被爆後の考え方や、ふるまい方は、ニーバーの言葉が物語っているように思われた。

変えられぬものとは、すでに起こった原爆という出来事。また、家族や友人を亡くしたという事実は、どれほど憎しみを顕わにしたとしても変えることはできない。この厳しい現実を受け入れざるを得ない。しかし、まだ変えられるものがあった。それは、未来のこと、後世のこと、世界のこと。それは、頑張り次第で変えられる余地がの

こっている。

今回、インタビューのなかで、もっとも耳にした言葉は「平和」であった。原爆の憎しみを越えて、平和な世界をつくっていくために声を上げていく。「平和」、これは、何があっても守るべきものである。

あとがき

原爆により校舎が壊滅した鎮西学院は廃校の危機に直面した。再建は不可能とみなす声が多くを占めていた。そうした苦境のなか、諦めていない方がおられた。当時、鎮西学園の院長であった千葉胤雄先生である。千葉先生は、みずからも被爆し、病に侵された身体に鞭を打って、周囲に理解を求めべく奔走した。先生の御尽力のおかげで、長崎を離れて諫早の地に学院を再開することができた。

現在、諫早の学院には慰霊碑が建立されている。そこには、この原爆で亡くなった鎮西学院の生徒と教職員のお名前と、千葉先生のお言葉が刻まれている。「War is hell」、千葉先生は、炎に包まれていく校舎のなかで、何度もこの言葉を繰り返したという。「War is hell」、鎮西学院に携わるものとして、この言葉は語り継いでいきたい。平和のバトンを後世に渡していくために。

謝辞

お忙しいなか、貴重な体験を話してくださったお二方に心より感謝の言葉を申し上げます。まことに、ありがとうございました。また、原爆の犠牲となられた鎮西学園の生徒のみなさま、教職員のみなさまに心からのご冥福をお祈りします。

参考文献

1. 原爆投下当時在校生記録誌編集委員会. (2011). 創立130周年記念事業 旧制鎮西学院中学校 原爆投下当時在校生名簿・被爆記録誌 「あの日僕らの夢が消えた」. 学校法人鎮西学院.
2. 鎮西学院千葉胤雄伝刊行委員会. (2014). 「この道にたえなる灯を」 鎮西学院第18代院長 千葉胤雄の生涯. 学校法人 鎮西学院. 発行協力 長崎新聞.